

氏 名	横 内 一 雄
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 254 号
学位授与の日付	平 成 15 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 文 献 文 化 学 専 攻
学位論文題目	Between Rhetoric and Realism: Exegetical Probings into James Joyce's Fiction (レトリックとリアリズムの間：ジェイムズ・ジョイスの小説の解釈的探究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 若 島 正 教 授 宮 内 弘 助 教 授 佐 々 木 徹

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、ジェイムズ・ジョイスの四つの小説作品——『ダブリンの人々』(*Dubliners*, 1914), 『若き芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916), 『ユリシーズ』(*Ulysses*, 1922), 『フィネガンズ・ウェイク』(*Finnegans Wake*, 1939)——の精読を通して、レトリック(言葉遊びや謎かけなど、テキスト上に張りめぐらされるさまざまな仕掛け)とリアリズム(彼の出自であるアイルランドのカトリック下層中産階級の批判的描出)という二つの志向のあいだで揺れ動き、その両立を試みた彼の文学の特質を明らかにすることである。この視点は、従来のジョイス研究の偏向を正すとともに、ジョイス文学の本質にまっすぐに迫ることを目指している。あるいは文学から離れ、テキストから遊離した議論が行なわれがちな昨今であるが、本研究ではジョイスのテキストにぴったりと寄り添い、それを読み解くなかで浮かび上がってくる疑問や発見を出発点に議論を展開することを心がけた。このことが本論文の副題を「ジェイムズ・ジョイスの小説の解釈的探究」とした所以である。

一. ジョイス研究における「レトリックとリアリズム」の問題

ジョイスはかつて『ユリシーズ』について「今後学者たちが何世紀にもわたって私の意図について議論し続けるように、多くの謎やパズルを埋め込みました。それが不滅を獲得する唯一の方法なのです」と言ったことがある。このことからわかるように、ジョイスは小説を単なる「お話」ではなく、さまざまな謎や仕掛けを含むきわめて遊戯性の高い芸術形式とみなし、その可能性を追求した。そのため、彼は芸術・文学の一大変革期の中で小説におけるモダニズムの立役者とみなされるようになった。

しかし、このことは必ずしも彼の文学が謎解きや言葉遊びに終始することを意味しない。彼は一方で、これまで誤り伝えられることしかなかった祖国の真の姿を世界に伝えたいという、いわばリアリスト的志向をも持ち合わせていたのである。実際、ジョイスのリアリズムを再評価しようという動きは、最近になって盛んになってきた。ジョイスは先駆けるモダニストであるとともに遅れて来たリアリストでもあるのだ。

ただ、彼は遅れて来た者の宿命として、すでに確立されたリアリズム小説の方法を無条件に楽観的に取り入れることはできなかった。彼は創作活動の出発点においてリアリズムの限界を見据えたうえで、それを打破する可能性を探っている。彼の特異な美学的議論や習作的実践はそのことを示しているように思われる。また、彼が育ち、彼が描こうとしたアイルランド、とりわけダブリンのカトリック下層中産階級の特異な状況も、彼に従来とは異なる形のリアリズムを模索させた。ここから出てくるのがレトリック——ここでは種々の文彩に加えて言葉遊びや謎かけ、その他テキストに仕掛けられた諸々のトリックをいう——である。ジョイスが小説のテキストに豊かな遊戯性を与えたのは、それによってより有効なリアリズムを達成するためではなかったか。これが本論文を通じて一貫する論者の立場であり、個々の作品分析を通して論証してみたい点である。

二. 個々の作品分析

ジョイスの文学活動は約四十年にわたり、手がけたジャンルも詩、評論、短編小説、長編小説、戯曲にまで及ぶ。とはいえ、彼の文学的価値を決定的にしているのは、先に挙げた一冊の短編小説集と三冊の長編小説を揃えてない。本論文の目的はジョイス文学を包括的に研究することではなく、微視的な視点をもってその本質に迫ることであるから、上の四作品——それもそのごく一部分——を特に考察対象として取り上げることにする。もっとも、その一作ごとに「小説」の概念を広げかつ覆していった作家のものであれば、四作品といえどもその趣きはまるで異なり、ジョイスの文学的展開を追うには足るであろう。

以下、第一部「初期作品」、第二部『ユリシーズ』、第三部『フィネガンズ・ウェイク』という本論文の構成にしたがって、その梗概を概観する。

①第一部「初期作品」

ここでは『ダブリンの人々』と『若き芸術家の肖像』を取り上げる。

第一章「迎合の物語——『恩寵』とダブリンの人々の道德喜劇——」においては、『ダブリンの人々』から最後から二つ目の（「死者たち」が付け加えられる前には最後の）作品「恩寵」を取り上げる。

この短編は通常、その題名の示すとおり、神の恩寵をめぐるダブリンの宗教生活を扱った作品だと考えられている。確かに、主人公トム・カーナン氏は、あるパブのトイレでトラブルに巻き込まれて負傷し、見舞いに来た友人たちに励まされ、最後には彼らに誘われて教会の静修に出かける。この神の恩寵を思わせる物語が、まさしくダンテ『神曲』の地獄篇・煉獄篇・天国篇を思わせる三部構成によって語られる。

しかし、この一見ただ宗教的なテーマを扱っただけに見える物語は、実はもう一つ別の側面を備えている。それは、ダブリンの経済生活が、ある意味においてその宗教生活以上に、丹念に描かれていることである。カーナン氏は頑固な昔気質のため、商売をうまく時流に乗せられずに、今では多方面に負債を抱える身である。彼がパブで災難に遭うのも、そのことによることが示唆される（債権者の一人の強硬な取立てで名高い人物が関わっているらしい）。これに対し、時代にうまく迎合し、商売を上向かせることに成功した人物として、食料品店のフォガティ氏が配されている。ビジネスマンにおもねりながら静修を執り行うパードン神父や、多数派の意見にやすやすと迎合するジョン・マクヘイルも、この部類であるといえる。そして、カーナン氏も最終的には友人の説得に折れて自説を曲げるというのが、この物語である。

ジョイスはこうした複数のレベルの物語を「恩寵」(grace)という概念の多義性によって結び合わせている。すなわち、これは神の「恩寵」(grace)の物語であるとともに、借金もの「返済猶予」(grace)の物語でもあり、また、「迎合」(ingratiation < in-gratia-tion)の物語でもある。そして、この「迎合」という概念が、カーナン氏を中心に繰り広げられる茶番劇の性質を、そしてそれによって宗教的・経済的・道德的に麻痺したダブリンの人々の精神構造を、ぴったりと表現している。つまり、ここにジョイスのレトリックとリアリズムが見事に結びついているというのが、本章の主旨である。

第二章「眼鏡を外したスティーヴン——『若き芸術家の肖像』と視覚の迷宮——」では、ジョイスが最初に出版した長編小説を考察する。

ジョイスは、この小説の前身となった一九〇四年のエッセイ「芸術家の肖像」において、現在の視点から過去を回顧する「身分証明書」的な自伝を書くのではなく、過去の中に身を置き、その過去を生き直すことによって「感情の曲線」を描出することを宣言しているが、この企てを十全な形で実現したのが『若き芸術家の肖像』である。すなわち、ジョイスは若き主人公の成長を描くのに、成熟した後の遠観した視点ではなく、成長過程における未熟な視点をその都度採用しながら、語りを進めている。その結果、未熟な主人公が迷妄に取り付かれるときには、読者もそれを共有することになる。これがジョイスの教養小説の方法である。

主人公スティーヴン・ディーダラス少年が眼鏡を壊して裸眼で登場する第一章D節は、こうした方法が象徴的な形で表れている箇所である。ここでは、多くの場合スティーヴンの不自由な眼を通して眺められるため、読者は不完全な視野を共有することになる。そして、このことに留意しないと、われわれは思わぬ誤解に陥ってしまう。ジョイスがいくつかのトリックを仕掛けてあるからである。とりわけ、スティーヴンがドーラン神父を見返す場面の描写は、読者を錯誤に導く欺瞞に満ちているのではないかと。本章では、このことを緻密なテキスト分析を通して明らかにしてみたい。

②『ユリシーズ』

ジョイスの二つ目の長編小説にして代表作である『ユリシーズ』からは、まずリアリズム的色彩の濃い前半部から第八挿話「ライストリュゴネス族」を、続いてレトリック的色彩の濃い後半部からは第十五挿話「キルケー」を取り上げる。

第三章「小市民的カニバリズム——『ライストリュゴネス族』とジョイスのリアリズム戦略——」では、ジョイスがリアリズム小説の伝統をどのように継承し、それをどのように乗り越えようとしているかを考察する。

まず、「ライストリュゴネス族」がブルーム氏をダブリンの下層中産階級の典型として描いていることを確認する。その上で、彼が歩く平和な都市にも実は暴力の影が潜んでいることを明らかにする。彼が受け取る宗教パンフレット、かつて巻き込まれた騒擾の記憶——これらは平和な小市民的社会にひそむカニバリズム的野蛮を暗示する。このとき、典型的な小市民であるブルームは、そうした野蛮を嫌悪する存在として描かれているのだが、別のレベルにおいては彼もまたカニバリズム的野蛮の担い手である。すなわち、とりわけ空腹時の空想において、そしてまた象徴的なレベルにおいて、彼はカニバリストとなる。

とりわけ、この挿話のハイライトと思われるのは、彼がデイヴィ・バーン食堂でたまたま居合わせた知人と談笑しながら、昼食を摂る場面である。これは一見ありふれた日常的風景でありながら、そこには平穏な小市民的世界を脅かすカニバリズム的幻想がいくつかのレベルで存在するのである。逆に言えば、ブルーム氏は異常で野蛮な願望を隠し持ちながら、表面的には穏やかな小市民として振舞っている。ここにわれわれはブルームの「小市民的カニバリズム」を、そしてジョイスの小市民的リアリズムが彼の含意豊かなレトリックによって裏切られていくさまを、見ることができるのではないか。本章ではこのことを確認したい。

第四章「ブルジョワ小説の外部——『キルケー』とジョイスの下層社会リアリズム——」では、ジョイスがダブリンの下層社会を提示するにあたって、いかにブルジョワ小説の外部を垣間見るにいたり、かつブルジョワ小説に回帰する運命にあるかを見定める。

ジョイスはしばしば、ダブリンの中流社会ばかりを見ていて下層社会を見ていない、と批判を受けることがある。これには一理あるが、それにも例外がないわけではない。彼は「キルケー」において珍しくダブリンの下層社会——売春とスラムの地域である「モント地区」——を、あくまでブルジョワ世界の外部として、描いている。挿話の方法がブルジョワ小説の形式を逸脱しかけているのは、まさにこの理由によるものと思われる。では、なぜこういう図式で『ユリシーズ』全巻のクライマックスが書かれなければならなかったのか。

ジョイスが「モント地区」に焦点を当てるのは、そこが彼の文学を貫く「自由な性愛の追求」のテーマの行き着く先であったからだと思われる。『スティーヴン・ヒーロー』『若き芸術家の肖像』において開始され、『ユリシーズ』においてもスティーヴンの性的墮落やブルームの性的倒錯という形で継承されてきた、結婚制度を逸脱する性愛の探求は、「キルケー」において一時決着を迎えるかに見える。ちなみに、トニー・タナーによれば、結婚制度はブルジョワ・リアリズム小説を成り立たせる基盤の一つである。だから、そうした制度を無効化する「キルケー」の世界は、当然『ユリシーズ』のブルジョワ小説としての存続を危ぶませるものである。しかし、「キルケー」の下層社会は、ブルジョワ社会からの訪問者であるスティーヴンとブルームを完全に呑み込んでしまうには至らない。ここにも結局はブルジョワ・リアリズムの論理が侵入してきて、それに導かれるように二人の主人公はこの世界から脱出するのである。

③『フィネガンズ・ウェイク』

最後に、ジョイス後期の大作を取り上げる。『フィネガンズ・ウェイク』はリアリズムと完全に決別し、ひたすらレトリックの遊びに終始しているかのように思われがちだが、実は、アイルランドの現実に深く根ざした想像力の賜物である。このことを示すために、第五章「『税門番にして鉄虫師』——鉄虫師の挿話におけるHCEのヴァイキング性——」において、第一部第二章冒頭の「鉄虫師の挿話」を精読する。

主人公HCEの第三名「イアウィッカー」(Earwicker)の起源を問うことから始まるこの挿話は、彼が行幸中の国王に「鉄虫師」(earwigger)と仇名を付けられる経緯を描いている。この挿話は、しかし、アイルランドの歴史的な性格を浮き彫りにする挿話でもあるのである。

歴史的次元においては、HCEと国王の邂逅が、十一世紀におけるノルマン人のイングランド征服、また、十二世紀におけるアングロ・ノルマン人のアイルランド征服、といった歴史的事件と類似関係にあることが示される。また、地理的側面

においては、二人が邂逅する場所がチャペリゾッドと思しき土地であることがまず確認され、続いてその土地が含意するアイルランドの雑種性が考察される。そして、最後にHCEに「鉄虫師」という仇名を与える国王の台詞について、緻密な分析がなされ、それがいかに上に示したようなアイルランドの歴史的現実を当てこすったものであるかが明らかにされる。こうして、ジョイスのレトリックの遊びがいかに彼の現実を表象しようとする意図と深く結びついたものであるかを確認したい。

本論文は、以上のような個別の作品分析を通して、ジョイス文学におけるレトリックとリアリズムの絡み合いを読み解き、ひいてはジョイス文学の本質に迫ろうとするものである。文学テキストならではの高度な遊戯性と、現実世界をその複雑な様相において批判的に捉えようとする試みの両者をともに追求し、その相互作用の一つのあり方を示したジョイス文学は、われわれが文学の将来を考えると、必ずや大きなヒントを与えてくれるに違いない。この確信が、本論文の全体を貫いている。

論文審査の結果の要旨

二十世紀文学の最高峰の一人としてゆるぎない評価を獲得しているジェームズ・ジョイスは、これまでに数多くの研究者による挑戦を受けてきた。その結果、ジョイス研究はしばしば「ジョイス産業」と揶揄されるように、新しい研究書や論文を次々と生産しつづけており、最新の批評理論が用いられる場としても機能している。そこでは、ジョイスのテキストから遊離して、ひたすら理論の切れ味を試すような傾向すら見受けられる。必然的に、ジョイス研究を志す者は、そうした論文の洪水の中で、いかに自分を見失うことなくジョイスと対峙するかが問われることになるだろう。本論文は、そのような問題意識から出発して、ジョイスのテキストに密着しながら、ジョイスの四つの主要作品すべて（『ダブリンの人々』、『若き芸術家の肖像』、『ユリシーズ』、『フィネガンズ・ウェイク』）をある統一的な視座から眺めようとした、きわめて野心的な試みである。

一般的に、ジョイスが作家としての生涯でたどった軌跡は、彼が採用した文体の変遷の軌跡として考えられている。すなわち、初期の作品では十九世紀的リアリズム小説の批判的な継承から出発しているものの、後期の作品では小説という枠組みすらも解体され、言語そのものが前景化されるような書物を目指すに至ったという捉え方である。こうしたリアリズムから非リアリズムへ、あるいは本論文の言葉を使えば「リアリズム」から「レトリック」へ、という軌跡は、ジョイスの著作の中で中間的に位置する『ユリシーズ』という一冊の書物の中にも、全部で十八から成る挿話群における文体の変遷として見出すことができる。つまり、最初の挿話群はまだリアリズム小説の枠組みを守った一定の文体が用いられているが、後半の挿話群へ移行するに従ってその枠組みが崩れ、多様な文体へと変化していくのである。

こうした一般的な捉え方に対して、論者は異議を提出する。論者によれば、ジョイスはたえずリアリズムとレトリックのはざまで揺れ動いた作家であった。ジョイスの作品に見られる言語遊戯性は、彼独自のリアリズムを達成するための手段であり、相互補完的なこの両側面はジョイスの創作活動の全般にわたって失われることがなかった、と論者は考える。このような統一的な視座に立って、本論文で論者は従来の捉え方を逆転させ、『ダブリンの人々』や『若き芸術家の肖像』といった初期作品にレトリックの要素を見出し、後期作品の『フィネガンズ・ウェイク』にリアリズムの要素を見出そうとする。そして、移行期の『ユリシーズ』を論じるにあたっては、前半の挿話にレトリックを、後半の挿話にリアリズムを強調する議論を展開しようとするのである。本論文の独創性は、まずそうした発想の逆転に存在している。

過去のジョイス研究がジョイスにおけるリアリズムをどのように見てきたかという批評史の流れを序論で概観した後、論者は第一部で短篇集『ダブリンの人々』に収録されている短篇「恩寵」をまず取り上げる。この短篇は、神の恩寵をめぐる宗教的なテーマを持った作品だと従来解釈されてきたが、論者はこの作品の題名になっている「恩寵」(grace)という言葉がテキストの中で多義的な意味を担っている点に着目しながら、宗教生活のみならず経済生活・道徳生活においてもダブリンの人々の麻痺した状況を描いた作品だと結論する。一つの言葉を手がかりにして大きな意味を引き出す、論者の持ち味と力量が充分に発揮された好論文である。

続く『若き芸術家の肖像』論では、主人公スティーヴンの視力をめぐる問題が取り上げられる。この小説世界はスティーヴンの視点から眺められているはずなのに、テキストを丹念に検討してみれば、視力の弱いスティーヴンには見えないはず

のものまで描写されている場面が何箇所もある。これは一見するとリアリズムで貫かれているように見えるテキストにジョイスがこっそり埋め込んだトリックであり、ステイーヴンが現実世界の中でさまようように、読者もこの視覚の迷宮の中で妥当な解釈を求めてさまようようことになる」と論者は言う。従来の『肖像』論では気づかれることがなかった、意表を衝く指摘であり、論者の緻密なテキスト分析が光っている。

『ユリシーズ』を論じた第二部では、前半から第八挿話が、そして後半から第十五挿話が考察の対象として選ばれる。第八挿話を論じた第三章では、『ユリシーズ』が小市民階級の人間を主人公とするリアリズム小説の伝統に立脚しつつも、そこから逸脱する要素を含んでいる点にジョイスの戦略がうかがえると論者は言う。この逸脱する要素とは、主人公ブルームが持つひそかなカニバリズム幻想であり、ブルームが食堂で昼食を摂るごく日常的な場面にそれが複雑な形で浮上している。丹念なテキストの読みに裏打ちされた論者の議論には十分な説得力が認められる。また、『ユリシーズ』の中で最も幻想的色彩を帯びた第十五挿話「キルケー」を論じた第四章では、この挿話がダブリンの下層社会を描いた唯一の挿話であるという観点から、当時のダブリンにおける現実的な状況をこの錯綜したテキストの背後に読み取ろうと論者はつとめている。

『フィネガンズ・ウェイク』を論じた最後の第三部では、主人公のHCEのまたの名である「イアウィッカー」(Earwicker)に焦点を当て、その起源をたどることによって、テキストに埋め込まれたアイルランドの成り立ちをめぐる歴史的起源が掘り起こされる。難解なことで名高い『フィネガンズ・ウェイク』の読解に挑戦したこの論文は、論者の今後の研究方向を示唆しているが、歴史というものがリアリズムという本論文全体のテーマと必ずしも一致するわけではない点や、歴史的資料の扱いなどに、問題を残している。

論者は、最新のジョイス研究の動向とその成果にも目を配りつつ、ともすればなおざりにされがちな緻密なテキストの読みに自分の研究の基盤を置こうとしている。そうした姿勢が、とりわけ第一部の優れた論文に見られるような、興味深い指摘を生んでいることは、特筆に値する。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。2003年4月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。